

※インターネット「はらまち九条の会」で、「九条はらまち」の全号を見ることができます。



九条はらまち

「はらまち九条の会」ニュース No. 87 (1月15日)

2009(平成21)年1月17日(土)発行 11正月

○14年前の1995年1月17日午前5時46分は阪神大震災の日。マグニチュード7.3、犠牲者6,434人。
＜フランクリン(1706~1790)＞ 1月17日アメリカのボストンに生まれる。独学で科学者、政治家、企業家として成功。アメリカ独立に外交官として活躍し、独立宣言書起草委員の一人。雷が電気であることを立証し、避雷針を発明。『フランクリン自伝』は自叙伝の名著。



- 「時は金なり」○「長生きしたければ、食事を減らせ」○「早寝早起きは、人を健康、富裕、賢明にする」
- 「勤勉さは幸運の母」○「神は自ら助けるものを助ける」○「人間は道具をつくる動物である」
- 「良い戦争なんてあったためしがない。あるいはまた悪い平和なんてあったためしがない」

(※今年のこのコーナーでは、は岩波新書『一日一言』などを参考に、「人とことば」等を考えてみましょう)

今年も新成人に『憲法』復刻版をプレゼント!

強風と厳寒の1月11日、相双地区の各市町村で成人式が行われ、「はらまち九条の会」では原町区会場の南相馬市民文化会館前で、「小高九条の会」では小高区浮舟会館前で、2年目の今年も『憲法』復刻版を新成人に贈呈しました。新成人は笑顔で受け取ってくれましたが、不況や就職難、リストラや人権無視の今こそ、しっかり『憲法』を読んでいただきたいものです。



○新成人に贈られた小冊子『憲法』と、『九条はらまち成人式特集の八六号、平和のことばの「栗」』。原町区では四三〇名に、小高区では二二〇名のひとり一人に手渡しされました。○新成人のお子さんやお孫さんに贈りたい方は、事務局までお申し出ください。

憲法手元にどうぞ

南相馬市の「はらまち九条の会」は11日、原町区の成人式会場となった市民文化会館前で、日本国憲法の冊子の復刻版を新成人に配布。「さあ、成人です。日本や世界の平和を願い、民主的な大人となるため憲法を読んでみましょう」と書かれたニュースレターも渡した。憲法学者・鈴木安蔵氏の出身地である小高区の会場前でも同様の冊子が配られた。

▲1月12日付『朝日新聞』福島版



会員から憲法の小冊子を受ける新成人

憲法全条文の小冊子を配布
はらまち九条の会
はらまち九条の会は
11日、南相馬市民文化会館前で成人式に出席する新成人に憲法全条文を載せた小冊子を配布した。
小冊子は三十八年前に旧原町市が全戸に配布したものの復刻版。大人への仲間入りを果たした新成人に憲法を



新成人に小冊子を配布する会員

読んで平和を守る心を持ってほしいとの願いを込め、昨年に引き続き実施した。

同封したチラシでは現憲法の草案のモデルになった「憲法草案要綱」の作成に携わった小高区出身の憲法学者鈴木安蔵の紹介もしている。小高九条の会も同日、浮舟文化会館前で新成人に小冊子を配った。

小冊子「憲法」を配布

憲法九条を守る運動を展開している南相馬市のはらまち、小高両九条の会は11日、原町、小高両区の成人式会場で新成人たちに小冊子の「憲法」復刻版を配布した。

旧原町市が一九七一年(昭和四十六)年、当時の市内全戸に配布した冊子の復刻版で、昨年に続き二回目の実施。会員らは冊子を配りながら、新成人に憲法九条の必要性を訴えた。

▲1月13日付『福島民友』相双版

▲1月13日付『福島民報』相双版

昨年暮、『南京虐殺事件71周年追悼式典』が行われました

▼JR東日本労組や九条の会
会員など43名の参加者と
ともに南京虐殺記念館前で。

12・13南京～平和のための国際交流に参加して

「小高九条の会」「はらまち九条の会」会員

小高区仲町 青田利幸

昨年2008年12月12～15日、JR東日本労組の平和活動の取り組みの一つとして長年続けられてきた中国・南京市での『南京虐殺事件71周年追悼式典』に、JR組合員、他OB、九条の会、九条連などからの参加者43名の一員として参列。南京虐殺の真実を事件の生存者の方々も交えて学び、哀悼の意を捧げ、平和を願う想いを語り合ってきました。この交流で学んだこと、感じたことは沢山ありますが、最も印象に残ったことを幾つか述べさせていただきます。

万同胞遭難71周年儀式暨南京国际和平日集会



怒りと慟哭のような追悼式のサイレン

その一つは追悼式開始の合図が印象的、というよりは背筋が寒くなる感じがしました。12月13日10時会場のサイレンを合図に、南京市全域から時には高く、時には低く、そして長く鳴り響く警報でした。それはまるで、私の記憶にかすかに残る恐ろしい空襲警報のようであり、日本兵に虐殺された南京市民の怒りと慟哭のようにも聞こえ、思わず身も心も凍るような感じ、今まで経験したことがない感覚でした。

突然一人の青年が近づいてきて 私に激しく叫んだ！

また、リニューアルされた南京虐殺記念館（正式には侵華日軍南京大虐殺遭難同胞記念館）での出来事も忘れられません。日本の戦争記念館にくらべ大変大きく、資料も充実している館内を夢中で見学しているうち、私は他の団員と離れ一人になっていました。すると二十歳前後の一人の青年が日本人と分かった私に、何か叫びながら止めようとする中国人の仲間を振り切り、近づいてきたのです。私は中国語は分からないと英語で答えると、今度は更に激しい口調で叫んだのです。「Go to Japan!」と。私はうらたえて返す言葉もなく、逃れるようにその場を離れました。

「戦争をしない国・させない国」にするために

北支から比島（フィリピン）へ送られた私の父が戦死したのは、終戦の2か月前の昭和20年6月15日とのことでした。私は3歳で、実際の戦争は全く記憶にありませんが、社会にも家庭にも戦争の傷跡が色濃く残る時代に少年期を過ごしました。それだけに戦争というものには強い想いを持ってきました。

南京事件も勿論詳しく調べ、その悲惨さ、残虐さについても十分理解しているつもりでした。しかし記念館での体験は現地ならではの強烈なものでした。私たち日本人も「あの戦争」で沖縄戦、東京大空襲、広島、長崎他多くの戦場で悲惨な被害者としての体験があります。しかし、私はこの体験で戦争での被害者、加害者ってあるのか？戦争って何なのか？と、もう一度深く考え直して、そして結果として「戦争をしない国・戦争をさせない国」にするために、素直に真っ正直に行動しなければならないという想いを深くしました。

「前事不忘、後事之師」周恩来

(2009年1月記)

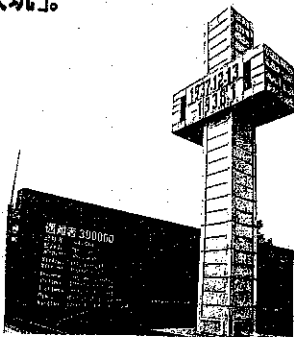
華日军南京大屠杀30万



▲「南京大虐殺30万人」の看板の前で青田さん。



▲虐殺の遺骸が集められた「万人坑」。



▲虐殺の日付を記した記念碑。

▼1937(昭和12)年頃の中国。



▼とうほう(東京法令出版)『日本史総覧』より。

南京大虐殺 長江に打ち上げられた死体。



【解説】日本軍は南京城の四方を完全に取り囲み、1937(昭和12)年12月12日の午後から夜間にかけて、壮絶な突撃戦を敢行、翌13日に南京城は陥落した。中国軍敗走兵や市民は唯一残された挹江門から長江へ逃げようとしたが、日本軍飛行機の機銃掃射を受けたり、溺死したりした。城内に入った日本軍はこの後2月半ばまでの間に中国兵や民間人の殺害・放火・略奪・暴行などを行い、虐殺された人数は30万人前後ともいわれる。日本国民には戦後東京裁判によって初めて明らかにされた。